

在日韓国人・朝鮮人の民族アイデンティティ — 世代間比較、及び親子間の関連 —

井 上 剛

【問題と目的】

植民地時代において祖国での生活基盤を失い、日本に渡航してくるか、もしくは強制連行という形で日本に居住することになった在日韓国人・朝鮮人にとっては、故郷・祖国、それに付随する文化は、失わされたもの、奪われたものとして捉えられるのであろう。在日韓国人・朝鮮人 1 世は日本を暫定的な仮住まいとして捉え、「帰国」を生活の原動力として日本での生活を営んでいく傾向が強いと指摘されてきている。また日本の生活の中においても、祭祀（チエサ）、民族料理、在日韓国人・朝鮮人（同胞）同士での付き合いや結婚など、自分たちの生活の中に根付く文化を守り伝承していくとする傾向が強いことが指摘されてきている。一方、在日韓国人・朝鮮人 2 世以降の人々にとって、朝鮮半島は、生れ育った故郷・祖国ではない。生活の中には日本の文化が必然的に入り込んでくることになり、3 世以降の世代にとっては日本の文化こそが、自身の生活文化となりつつあると言われ、「民族性の危機」が指摘されている。しかしながら、このような状況を「危機」とする捉え方とは別に、3 世を中心とした多様化してきているアイデンティティのあり方に着目している研究もあり、民族アイデンティティそのものが歴史的な流れと世代間伝承を通して、質的に変遷してきている可能性も示唆される。その意味で、1 世から現在の 3 ~ 4 世に至るまでの社会状況の変化、歴史的変遷、世代間伝承を踏まながら、在日韓国人・朝鮮人の民族性・民族アイデンティティというものを再び広く捉え直す必要性が生じてきているとも言える。

本研究においては、一連の民族アイデンティティ研究の枠組みを参考にしながら、在日韓国人・朝鮮人の民族アイデンティティについて、特に世代間に存在する問題を取り組んでいきたい。そして、出来るだけ幅の広い複数の世代の在日韓国人・朝鮮人を対象として、それぞれの世代の民族アイデンティティの特徴を描き出すとともに、親と子の間では民族アイデンティティにどのような関連があるのかということを明らかにしていきたい。その上で、それらの結果を歴史的・社会的背景を踏まながら考察していくべきだ。

以下に本研究における目的をまとめる。尚、目的 1・目的 2・目的 3 はそれぞれ、後の分析 1・分析 2・分析

3 に対応している。

<目的 1>

在日韓国人・朝鮮人の民族アイデンティティに関する 3 尺度（態度次元尺度、行動次元尺度、情操次元尺度）の作成。1 世から現在の 3 世～4 世に至るまで全ての世代の男女にとって意味のある、幅の広い文化的諸領域を含む尺度を作ることを心がける。

<目的 2>

民族アイデンティティの世代間比較。目的 2 に関する仮説は以下の通り。

仮説 1：態度次元尺度、行動次元尺度においては、上の世代ほど全体得点が高い。仮説 2：ルーツへの思いや、儒教的な態度や行動、同じ民族同士の繋がりや結婚を重視する態度や行動で、上の世代は得点が高くなる。仮説 3：情操次元尺度においては下の世代ほど得点が高い。仮説 4：情操次元尺度の中でも上の世代ほど否定的民族同一性を持つ傾向が強くなる。

<目的 3>

民族アイデンティティの親子間での関連に関する探索的研究。

【方法】

<尺度項目作成> 在日韓国人・朝鮮人の方々、研究者などの協力の下、在日韓国人・朝鮮人の生活に根付く民族の文化を掬いあげることが出来るよう尺度項目が作成・選定された。

<調査> 1996年 9 月～12 月にかけて、在日韓国人・朝鮮人の各種団体の関係者の方々、及びその家族に対して質問紙が配布され、回収された。またその際に出来るだけ親子 2 世代にわたって答えていただけるようお願いした。

<被験者> 男性 140 名、女性 145 名、計 285 名（18 歳～71 歳）の在日韓国人・朝鮮人。

【分析 1：民族アイデンティティ尺度作成】

<方法> 在日韓国人・朝鮮人の民族アイデンティティに関する 3 尺度それぞれに対して因子分析（主因子解、バリマックス回転）を施行。

<結果・考察> それぞれの尺度に以下のように因子が

抽出され、それぞれが下位尺度とされた。態度次元尺度：「家族・親族の絆（儒教的態度）」「生活文化」「民族集団・同民族結婚」「民族運動・歴史意識」「名前」「ルーツ」の6下位尺度からなる。行動次元尺度：「家族・親族の絆（儒教的行動）」「社会的行動」「家庭内習慣」「民族集団（行動）」の4下位尺度からなる。情操次元尺度：「肯定的民族同一性」「否定的民族同一性」の2下位尺度からなる。また各尺度、各下位尺度に関して、信頼性・内的整合性、男女差、尺度間相関、下位尺度間相関、各尺度に関わる外的要因が確認された。これをもって、目的1は一応達成されたが、果たしてこの3尺度が全ての世代に意味のある尺度でありうるかという問い合わせ、分析2、分析3をもって試されるものと考えられた。

【分析2：世代間比較】

＜分析方法＞ ①3要因の分散分析（年齢×世代×性差）。②年齢群間比較：男女を分けた上、高年齢群（40歳以上）と低年齢群（18～39歳）での対応のないt検定。③世代間比較：男女を分けた上、第1世代（1世～2世）と第2世代（2.5～3.5世）での対応のないt検定。

＜結果・考察＞ 以上の分析により、男女いずれにおいても、態度次元尺度全体、及び行動次元尺度全体において、上の世代の方（高年齢群、第1世代）が得点有意に高いという結果は得られず、仮説1は支持されなかった。また、ルーツ、家族・親族の絆（儒教的行動）、家族・親族の絆（儒教的行動）、民族集団・同民族結婚、民族集団（行動）などで、上の世代の方が下の世代よりも有意に得点が高いという結果が一部を除いて得られ、仮説2はほぼ支持された。家族・親族の絆（儒教的態度）、家族・親族の絆（儒教的行動）、民族集団・同民族結婚については、在日韓国人・朝鮮人社会に根付いているさる儒教的思想・精神に根があると考えられるとともに、それらが生計・生活を成り立たせていくためのエージェントとしても機能してきたことが、上の世代における得

点の高さを導いているものと考えられた。また情操次元尺度においては一部を除いて下の世代の方が肯定的民族同一性を強く持ち、上の世代の方が否定的民族同一性を強く持つという結果が得られた。これにより仮説3及び、仮説4はほぼ支持された。Driedger, L (1976) は、特定民族への厳しい社会的環境は、自分がその民族であることを受け容れる心の働きを阻害し、自民族への否定的感情を強めることを指摘している。上の世代における否定的民族同一性の高さと肯定的民族同一性の低さの背景には、このような生涯に渡る厳しい生活の歴史が存在しているものと考えられる。

【分析3：親子間の関連】

＜方法＞ 父－息子間、父－娘間、母－息子間、母－娘間において、同じ下位尺度間での相関を検討。

＜結果・考察＞ 親子の中でも、父－息子、母－娘といいうように、同性間での相関の方が異性間での相関よりも有意な相関が多くみられた。また、全体的に家庭内習慣、家族・親族の絆（儒教的態度）、家族・親族の絆（儒教的行動）などの家庭内での態度・行動に関する親子間での相関が高く、特に父親との間で相関が高い。従来、在日韓国人・朝鮮人家庭の中では、そのような領域に関しては父親が決定権や影響力をもつことが多いとされてきており、現在においてもそのような傾向は他の領域に比べて強く残っているものと考えられる。しかしながら、母－娘間においては、このような領域での関連より、名前や肯定的民族同一性といった、自民族への感情・価値づけや、本名をどう名のるかなどという在日韓国人・朝鮮人が日本社会で生きていくための基本的なスタンスやスタイルでの関連が高いという結果が出された。従来言われてきた、父親の方針を守り、子供達にも伝えていくという在日韓国人・朝鮮人家庭における母親の役割とは違った、新しい母親の機能が生じてきている可能性が示唆された。